

## 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 4 月 15 日現在

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2008～2009

課題番号：20720146

研究課題名 (和文) 小学校における英語コミュニケーション能力の評価方法のデザイン

研究課題名 (英文) Designing communicative testing and evaluation for young learners

研究代表者

ジェラード マーシェソ (GERARD MARCHESSEAU)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：60403763

研究成果の概要 (和文)：本研究は日本の低年齢の学習者 (小学生) の英語コミュニケーション能力の測定法の開発に寄与する。本研究は、コミュニケーション能力の測定においては、テストの信頼性や実用性などいくつか克服すべき課題があるものの、テストの妥当性が改善されたこと、肯定的な波及効果が顕著であったことなどの利点も明らかにした。また、研究協力者である小学校の英語教員志望の院生が評価基準の設定から、実際のテストでの測定や評価まで行う機会を得られたことも有意義であった。

研究成果の概要 (英文)：This research contributed to development of communicative testing of English of young learners (elementary school students) in Japan. It illuminated several challenges for communicative testing; specifically achieving test reliability and practicality; and it highlighted some of the benefits; such as improved test validity and positive washback. It was also significant that the participants of this research were graduate students that want to be elementary school English teachers. This gave them the opportunity to participate in administering and rating an assessment procedure as well as designing rating scales.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：young learners, communicative testing

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究を開始した当初は、具体的な学習指導要領などはないが、97%の小学校で英語活動は行われていた。現場の英語担当者は不安を抱えながら英語指導を進めている状態で、英語能力の測定に関しては、一部の教育

機関や自治体で行われていたものの、英会話学習者向けの児童英語検定や他国のテストをモデルとして作成したテストなどが使用されていた。

(2) 児童の英語能力の測定にあたり、コミュニケーションを図ろうとする意欲や積極的

な態度の誘引を指導目標とする、日本の小学校英語教育の趣旨に合った独自のコミュニケーション能力テストを構築する必要があった。また、クラス担任の小学校教員を中心にALTや外部講師を指導者として授業が行われており、テストを実施する場合、英語力や経験が不十分な評価者が児童のコミュニケーション能力を測定することも予想された。そのような状況の中で、誰がどこの小学校で実施しても、高い評価者間信頼性が得られるよう、明確な評価基準を設けることも、コミュニケーション中心のテストの作成と同様に重要であり、本研究の核心であった。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の主たる目的は、評価者間信頼性やコミュニケーション能力テストに関する問題点を調査することである。信頼性、妥当性ともに高く、学習者に肯定的な波及効果を与えるテストの作成、つまり、受験者である小学生児童にとって公正であり肯定的であるとともに、テストを実施する側の評価者にとっても分かりやすく、正確に測定、評価できるテストの作成を目指した。

また、実際のテストは、英語母語話者、非英語母語話者、経験豊富な指導者、そうでない指導者など、様々な指導者によって実施される。そのため本研究では、英語母語話者と非英語母語話者である日本人大学院生に研究協力してもらい、その評価を比較する。またテスト後にアンケートを実施し、テスト結果と児童の英語やテストに対する態度や意見などとの間に相関関係が存在するかを明らかにすることも本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

(1) 文献研究をもとに既存のテストを変更、修正し新たなテストを考案した。それを鳴門教育大学附属小学校の5年生 74名に受験してもらった。評価者として筆者の他、児童英語指導の経験のある英語母語話者3名に参加してもらい、合計4名の評価者でテストを行った。3名には評価者間信頼性を高めるため、テスト実施前に評価基準について訓練を受けてもらう。テストは1名の評価者が2名の児童を評価する形で行われた。従来の面接官が一方的に質問する形式のテストではなく、児童にタスクを課し、評価者もそのタスクに参加し、2名の児童同士もやり取りする機会が与えられる。すべてのテストがビデオ撮影され、評価者が自分で実際のテストで評価しなかった児童のビデオを見て評価することにより、1回のテストで4名からの評価を得ることができた。

評価基準は発音、コミュニケーション能力(言語能力の限界を補うためのスキル、例えばジェスチャーや言い換え、聞き直しなど)、

正確さの3項目で、それぞれの項目について1から6の点数で評価する。1から6の点数の基準についての記述はあるものの、評価者にとっては基準が曖昧である可能性もある。曖昧さを回避するために評価者訓練でも実際のテストのビデオを見せて、それぞれの点数の評価基準について説明し、実際に評価の練習をしてもらった。

また、テスト実施後、テストを受けた児童にアンケート調査を行った。設問は1. 英語が好きか、2. テストは楽しかったか、3. 英語は得意か、4. 英語の塾に通っているかの4つである。

(2) 2回目のテストも同じく鳴門教育大学附属小学校の5年生(前出の5年生とは別年度)を対象に行われた。評価者訓練やテストとアンケートの内容、ビデオ撮影方法は1回目と全く同じであったが、2回目のテストの評価者は非英語母語話者にした。小学校の英語教員を目指す鳴門教育大学の院生5名が評価者として研究協力してくれた。また2回目のテストでは、108名を対象に行われたが、その内半数の54名のテストには1回目と同じ評価基準が使用され、残りの半数のテストでは異なる評価基準が採用された。この新しい評価基準は、前半半数のテストを終えた時点で、評価者とともに実用性を考慮して修正されたものである。

2回目のテストの半分に異なる評価基準を設定したことにより、英語母語話者と非英語母語話者間の比較だけでなく、同一評価者の異なる評価基準間の比較も可能となる。

## 4. 研究成果

### (1) テスト結果と評価者間信頼性

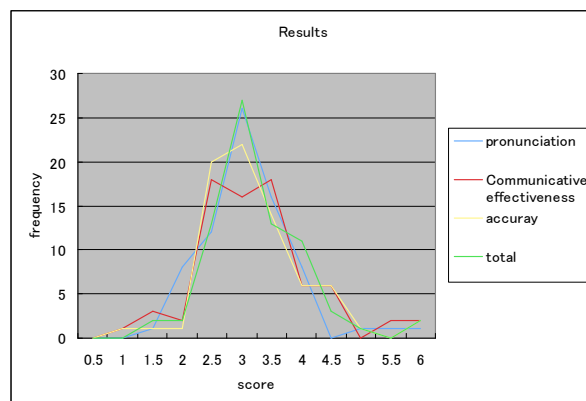


図1 テスト結果

2回にわたり、合計182名の児童を対象として行ったコミュニケーション能力テストは、図1のような結果となった。

表1では1回目のテストの英語母語話者4名(評価者A, B, C, D)の評価者間信頼性を

ピアソン相関係数で示した。左の縦列の二つのアルファベットは評価者のペアを表わす。右の縦列の数値がピアソン相関係数である。例えば、表1の一番上にある評価者Aと評価者Cのペアのピアソン相関係数は0.6202である。つまりこの2名の評価者は、テストで62%に当たる受験者に対して同じ評価を与えていることを意味する。

表1の結果を単純に一般的なピアソン相関係数として見れば、高い相関関係が認められると結論づけられるかもしれないが、評価者間信頼性としては決して高くはない。

評価者ペア	ピアソン相関係数
A-C	0.6202
A-B	0.6265
A-D	0.7796
C-B	0.6730
C-D	0.7122
B-D	0.7370

表1 評価者間信頼性

非英語母語話者を評価者として行った、2回目のテストにおける評価者間信頼性も同じ方法で算出した。結果は英語母語話者の評価者間信頼性とほぼ同じであり、英語母語話者であるか否かで統計的に顕著な違いは見られなかった。よって、本研究で得たデータでは、英語母語話者と非英語母語話者間での評価者間信頼性の高低が生じるという仮定を裏付けることはできなかった。また、2回目のテストで前半、後半と評価基準を変更したが、そこでも特に違いは見られなかった。つまり、異なる評価基準間でも評価者間信頼性の高低は生じなかったということだ。

しかし、本研究に参加した評価者たちとの意見交換で得られた情報をもとにした主観的な見解ではあるが、英語母語話者と非英語母語話者間で次の二つの相違点が明らかになった。一つは、英語母語話者の方が非英語母語話者である日本人評価者よりも、他の評価者の評価の違いを容認する傾向にあること。二点目は、英語母語話者は日本人よりも評価者間信頼性よりテストそのものの妥当性を重要視する傾向にあることである。

## (2) テスト結果とアンケート結果の相関関係

児童のテスト結果とアンケート結果を比

較した。アンケートの内容は表2の通りである。

質問	答え	人数
1. 英語は好きですか	とても好き	37
	やや好き	32
	好きではない	5
	全然好きではない	0
2. このテストは楽しかったですか	とても楽しかった	47
	やや楽しかった	26
	あまり楽しくなかった	1
	全然楽しくなかった	0
3. 英語は得意ですか	得意	4
	やや得意	34
	あまり得意ではない	31
	苦手	5
4. 塾で英語を勉強していますか	はい	43
	いいえ	31

表2 アンケート結果

統計的に有意な相関関係が見られたのは次の4点である。

1. 英語がとても好きだと答えた児童はやや好き、または好きではないと答えた児童よりも、テスト結果が良かった。  
( $t=3.13$ , sig. at  $p<.0.5$ )
2. テストが楽しかったと答えた児童は、テストがやや楽しかった、またはあまり楽しくなかったと答えた児童よりも、テスト結果が良かった。  
( $t=1.809$ , sig. at  $p<.0.5$ )
3. 英語が得意である、またはやや得意と答えた児童は、得意ではないと答えた児童よりもテスト結果が良かった。  
( $t=3.49$ , sig. at  $p<.0.5$ )
4. 塾で英語を勉強していると答えた児童は、塾に行っていない児童よりもテスト結果が良かった。  
( $t=3.95$ , sig. at  $p<.0.5$ )

## (3) 質的研究での調査結果

本研究では量的研究のみならず、観察や意見交換などの質的研究も実施された。筆者は研究協力校の鳴門教育大学附属小学校の英語教育に指導者として、またアドバイザーとして4年間にわたり携わってきた。筆者の長期に渡る児童の観察や、評価者や研究協力校の教員との意見交換で得られた調査結果も、本研究では大変重要である。質的研究での結果を大まかではあるが総括すると、次の3点が明らかになった。

1. 児童はテストのみならず、テストを受けるプロセスを楽しみ、テスト自体も有益なものだと捉えている。このことからテストの実施は肯定的な波及効果をもたらすことを示唆している。

2. 研究協力校である鳴門教育大学附属小学校の英語担当教員も、テストから生じた肯定的な波及効果を認識すると共に、テストを単なるの英語力の査定方法ではなく、学習の一環と考えることが明らかとなった。

3. 本研究に参加協力した、小学校の英語教員志望の大学院生から、テストの作成や評価基準の設定の段階から実際にテストでの児童の評価までに携われたことは、非常に価値のある経験であったという感想が聞かれた。このことから、既存のテストを安易に利用するのではなく、日本の小学校英語教育の趣旨に合ったテストや評価基準を構築することの重要性がうかがえる。彼らがコミュニケーション能力の測定を取り巻く課題に対する理解を深めたことは、今後の研究や将来の教育現場での活躍に貢献すると思われる。

以上三点全て、学習者である児童、指導者である日本人の教員や英語母語話者双方のコミュニケーション能力テストに対する肯定的な姿勢を示している。このような肯定的な姿勢はテストのみならず小学校英語教育全体の促進につながるであろう。

#### (4) まとめ

本研究では、英語母語話者である評価者と非英語母語話者である評価者間での評価者間信頼性の測定を試みたが、顕著な違いは見られなかった。また、異なる評価基準を用いて同一のテストに対する同一評価者間での測定も行ったが、差異はなかった。全ての評価者間信頼性は高いとはいいがたい数値であった。このことからコミュニケーション能力テストにおいて、高い評価者間信頼性を得ることは容易ではないことが明らかになった。

しかし、テストを受けた児童にも、テストを実施した指導者にも、肯定的な波及効果が見られたことは、コミュニケーション能力テストを実施する意義があることを裏付けるのではないだろうか。本研究のように多数の評価者の参加により、評価者間信頼性を高める方法は、実際学校で行うテストでは実用的ではなく、実行不可能かと思われる。しかしながら、コミュニケーション能力テストを課すこと自体は、英語で意思の疎通を図ろうとする意欲や積極的な態度の誘引を指導目標とする、日本の小学校英語教育の現場では有益であると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① Moedjito, Harumi Ito, Gerard Marchesseau, Relationships among

EFL Learners' Knowledge of Pronunciation, Oral Performance, and Intelligibility, 「ARELE」全国英語教育学会紀要、20、pp.71-80、査読有、2009.

〔学会発表〕(計2件)

- ① Gerard Marchesseau, Striving for Positive Washback in Assessment: A Preliminary Study, 第34回全国英語教育学会東京大会研究発表(昭和女子大学) 2009/08/08.
- ② Gerard Marchesseau, The theoretical justification and practical challenges for communicative language testing of young learners, 第35回全国英語教育学会東京大会研究発表(島根大学), 2008/08/10.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

ジェラード マーシェソ (GERARD MARCHESSEAU)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：60403763

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし